



2011年3月2日放送

印象に残る症例①

あきば伝統医学クリニック 来村 昌紀

千葉中央メディカルセンター脳神経外科
千葉大学大学院医学研究院先端和漢診療学講座

まず自己紹介をさせていただきますと、私は脳神経外科医で漢方薬を使用した頭痛外来を行っております。そういう立場から印象に残る症例のお話をさせていただきたいと思えます。まず、最初に私が漢方を使うきっかけとなった出来事からお話させていただきたいと思えます。

現在では脳神経外科医もそれぞれの専門性が細分化されておまして、様々な subspeciality を持つという状況になってきております。私も脳神経外科専門医をとった後に、subspeciality を決めることとなりまして、大学病院の付属病院で頭痛外来を始めさせていただきました。

最初の頃は漢方の知識もなかったために西洋薬のみで頭痛外来を行っておりました。ところが、いざ頭痛外来をはじめてみますと、頭痛外来をおとずれる患者さんの9割以上が脳神経外科的には手術の必要のない、いわゆる一次性頭痛の患者さんであったわけです。その多くは緊張型頭痛や片頭痛ではありますが、そう単純に割り切れず、なかなか西洋薬の鎮痛薬や筋弛緩薬等ではうまくいかない患者さんも多くいることも事実です。

私はその時に漢方薬が頭痛に有効だという漢方の勉強会に出席する機会を得まして、最初のころは漢方薬が頭痛に効果があるのかなど、半信半疑でしたけれど、いちど、だめもとでもいいから使ってみようと思ひまして、最初は病名投与的に漢方薬を使い始めてみました。今日は、その記念すべき第一号の患者さんをご紹介しますと思います。

まずはじめに、頭痛治療の現状ですけれども、WHO（世界保健機関）はいくつかの治療に重点を置く疾患を挙げておりまして、頭痛もそのひとつとなっております。Lifting the burden、burden というのは荷物とか重荷という意味なんですけれども、「みんなで荷物を背負おきましょう」「みんなで頭痛の責任を果たしましょう」というスローガンをかかげまして頭痛治療の Global Campaign を展開しているところであります。

その理由の一つとして片頭痛だけをとりあげましても、片頭痛は働き盛りの年代や学校に通う年齢の子供さんが多いために、我が国における頭痛による経済損失だけでも 6000 億円以上といわれております。このことをうけて 2008 年には日本頭痛学会の頭痛専門医制度が厚生労働省の認可をうけた広告のできる専門医として制度が確立されております。

では症例に入りたいと思います。患者さんは 78 才の女性であります。主訴は頭痛であります。既往歴には胃潰瘍があります。現病歴はもともとこの方は失神を主訴に循環器内科を受診されて精査の結果、その失神の原因は sick sinus syndrome（洞不全症候群）であったわけですけれども、ペースメーカーの適応となりました。この際の頭部 MR A にて前交通動脈に未破裂脳動脈瘤を指摘されております。

それで脳神経外科の私のところに紹介となったわけですけれども、この動脈瘤に関しましては未破裂脳動脈瘤で、今回偶然に見つかったためにご本人とご家族と相談の結果、手術を希望されずに経過観察となっております。ところが、この方は以前より 30 年らしい頭痛持ちでありました。それが天気の悪くなる日、雨の降る前の日などになると特に頭が重く、動脈瘤が発見されたことにより、くも膜下出血が起こったのではないかと心配されて救急受診されるということを繰り返していました。

西洋医学的には、おそらく若い頃の頭痛は問診結果から片頭痛と思われましても、年齢とともに変容性片頭痛（transformed migraine）となり、動脈瘤の発見に伴う、くも膜下出血への不安なども加わって、現在の国際頭痛分類にはありませんが、いわゆる慢性連日性頭痛（chronic daily headache）となったものと考えました。普段の慢性的な頭重感が、天候などの影響をうけ、ときどき増悪し、くも膜下出血だと心配されて救急受診を繰り返しているものであると考えました。

東洋医学的な所見では、身長 145 cm、体重 40kg の小柄なおばあちゃんでありました。脈候は浮、緊張は中等度。舌候は淡泊で腫大し歯痕を認めました。腹候は腹力軟弱で胃部振水音と小腹不仁を認めました。この慢性連日性頭痛は西洋医学的にもなかなか難しいもので頭痛専門医でも治療が難しいのが現状です。またこの患者さんは胃潰瘍の既往があるた

めに鎮痛薬も使いにくい状況ですし、高齢で小柄な方のため筋弛緩薬などもふらつきなどの副作用がでる可能性もあります。しかし東洋医学的には、問診からは、天気雨の頭痛などとも言われますけれども、そういう種類の水毒による、水滞による頭痛と考えられるわけです。この「天気をみる」頭痛というのは、一般臨床ではとても患者さん、訴えられる患者さんは多いわけですが、国際頭痛分類にはこういう分類は残念ながらありません。東洋医学的な所見で、この方も舌の歯痕や胃部の振水音、脈候などからも水滞であると考えまして、水をさばく方剤である五苓散エキス製剤を7.5g分3食前から開始いたしました。そうすると、いままでに週に1, 2度救急受診されていたのが、五苓散を投与して4日目ころより頭痛は改善し、10日目ころより、30年来の慢性連日性頭痛はうそのようにすっかりと治まり、定期受診だけで救急受診されなくなりました。

これはこの患者さんだけではなく、患者さんのご家族、ひいては救急に対処していたわれわれスタッフにもたいへん喜ばれまして、私にとっては始めて漢方薬を使用して劇的に効果を得た忘れられない患者さんとなっております。またこの患者さんに出会いまして、私は漢方薬はきちんと勉強して使用すればとても効果があるんだなあということを実感しまして、深く漢方の勉強にはまっけていくこととなったわけです。

ここで五苓散は、傷寒論霍乱病篇に、霍乱とは吐瀉病ですけれども、急性の吐き下しの病で、今で言うと急性胃腸炎のような病態だと考えられますけれども、傷寒論霍乱病篇に「霍乱、頭痛、発熱し、身疼痛し、熱多くして水を飲まんと欲する者、五苓散之を主る。」とあり、小児の急性胃腸炎や口渇、頭痛などによく使われている方剤です。脳神経外科領域では頭痛以外にもめまいや、最近では慢性硬膜下血腫の再発予防などにも使用されてきています。

この方剤は沢瀉、朮、茯苓、猪苓、桂枝の5味からなる方剤ですが、子供から高齢者まで大変飲みやすく、甘草を含まないためpseudoアルドステロン症や、黄芩を含まないため肝障害などの副作用が少なくたいへん使いやすいお薬で、私の頻用処方の一つでもあります。

私は患者さんがよくなる手段であれば西洋医学、東洋医学にかかわらず、それぞれの良いとこどりをして治療してあげればよいとの立場で和洋折衷で治療をしています。

この放送が先生方の患者さんへの治療手段がひとつでも増える手助けになれば幸いです。